
M2（えむちゅ〜）

チキン☆サラダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M2（えむちゅ）

【Nコード】

N2393P

【作者名】

チキン☆サラダ

【あらすじ】

入学早々の好きなものというお題の作文発表で女の子向けアニメのキャラクターが好きだと発表した主人公。

当然クラスメイトからは奇異の目で見られてしまい、次の日からキャラクターの頭文字をとったM2（エムツー）というあだ名になってしまう。

そんなあだ名が付いて数ヶ月……主人公が危ない目に逢おうとしているところに、そのキャラクターが現れる。

はたして本物か偽者か。そしてその目的とは？

プロローグ（前書き）

今作が二作目となります。最低でも週に一度の更新をしていこうとおもいます。よろしければお読みください。

プロローグ

「……という事で僕の発表は終わります」

僕はそういうと一礼してクラスメイトの表情を見渡した。クラスメイトからはまばらな拍手が僕に送られていた。

今、何が行われているのかというと、自己紹介を兼ねた自分の好きなものという、題名の作文発表会だ。中学に入学し二週間。この時期には大方の中学校で、似たような題材の発表が行われている事だろう。僕の学校、クラスも例外にもれることなくその発表が行われているのだった。

「おいおい。お前まだそんな物が好きなのかよ。そんなの皆もうとつくに卒業しちまつてるぜ。なあ皆？」

僕が自分の席へ戻ろうとすると、わずか二週間の内に、このクラスのリリーダー的存在へとなっていた内藤が言ってきた。皆、内藤の言葉に同調するかのようにながやかと、声を出し始めた。

「ああ好きだぜ。だってこの作文は好きなものというお題だろ？それなのに嫌いなものを発表するやつがいるかよ」

僕は面倒くさそうに内藤に応えた。正直こいつはいけ好かない。「いやいや。分かってるし。そういう事じゃなくて、そんな幼稚なものを好きで恥ずかしいのかって言ってんだよ。お前日本語ちゃんと理解してるのかよ」

全く分かってるさ。わかっていたが面倒だから、適当に応えたというのに……。

「内藤が幼稚だというのは勝手だが、好きなものは好きなんだよ。お前は自分の好きなものを他人に否定されたら、その好きな感情を否定するのか？」

「はいはいそこまで。友達同士熱く意見を言い合うのはいいけど、まだ続きもあるから今日はそこまでね」

今まで黙ってみていた先生が手を叩きながら、僕と内藤を注意し

た。

「すみませんでした。すぐに着席します」

僕は先生の方に直るとそう言って頭を下げ、自分の席へと行ったのであった。内藤はまだ僕に何か言いたそうではあったが、僕が先生に謝った手前、それ以上言う事ができず、先生に頭を下げ黙ったのであった。

ちなみの僕は幼少期に見ていた女の子向けアニメ「聖月戦士ミンキームーン」の主人公キームーン」を好きだと、発表したのだった。

僕は次の日からこのクラスでM2（エムツー）というあだ名になったのであった。ミンキーの頭文字のMとムーンの頭文字のMから来ているらしい。

まったく。中学生とは直ぐにアルファベットを使いたがるものである。

一章 一部

ピピピピッピピピッ。

目覚まし時計がなっている。僕は枕元に置いてある目覚まし時計に手を伸ばし、スイッチを切った。時計の針を見るといつも僕がおきる時間の、7時を数秒過ぎたところだった。

僕は秒針が動くのを眺めつつ、眠りの淵から徐々に覚醒していった。頭が目覚めていくとともに、今日見た夢を少しずつ断片ではあるが思い出していった。

まったく何故今になってあの夢を見たのだろう。あの日からもう二ヶ月もたっているというのに。僕はミルクイムーンが好きだし、あの発表をした事も、あだ名がM2になってしまった事も後悔していないはずなのに。僕の潜在意識があのある出来事を、何か特別なものだと考えているのだろうか？

考えすぎか、そうか僕はあの時少なからず内藤に、嫌な感情をいだいてしまったのが原因か。全く僕もまだまだ子供だな。あの程度の感情を潜在意識下であるにしても、コントロールできないなんて。僕は立ち上がると制服に着替えた。六月も中旬に入り、夏服へと移行されているので着替えにかかる時間はそんなに長くない。鞆も持ち準備万端。さあこの扉をあけて一步でたところから真宮寺聖夜しんぐうじ せいやとしての一日が始まる。

部屋を出て階段を降りリビングに行くとなねーさんの姿があった。彼女の名前は正美だ。まゆみ僕の四つ年上で現在高校二年生ではあるが、母が父の単身赴任に付いていつているせいもあり、母代わりをしてくれている。母がいなくなって約二ヶ月。姉の母親代わりも徐々に板についてきたようだ。普通こういった雑務は面倒に思えるが、姉はなんだかんだ文句を言いながら、楽しんでやってくれているよう

だ。

「やっと降りてきた。早くご飯食べよう」

「ねーさんありがとう」

僕はそう言うのと椅子に座った。ねーさんはご飯を注ぎ僕に茶碗を渡してきた。

「ありがとう」

僕は茶碗を受け取りながら言った。

ねーさんは僕に茶碗を渡し、自分の分も注ぐと席に着いた。

「いただきます」

ねーさんが席に着き、手を合わせるのに合わせて僕とねーさんは食事の挨拶をしたのだった。

おかずは焼きハムと卵焼きそして味噌汁だった。最初の頃味噌汁は、インスタントだったけれども、どうせならちゃんと私が作るとある日断言しそれから毎日味噌汁を自作するようになった。に電話をして作り方を聴いていたが、最初飲んだときは正直美味しくはなかった。けれども、今では母と遜色ない美味しさになっている。まあ僕は自分の舌に、あまり自信がないので、世間一般に見て美味しいかどうかは分からないけれども。

食事中はねーさんと学校の事や、最近ワイドショーを賑わせている二枚目俳優の話などをした。

ねーさんと話しているうちに、食事は直ぐに終わってしまった。

食器を流しに持って行き、自分が使った食器を洗おうとすると……

「ああ私がするからいいわよ。そこに置いておいて」

「あっいやでもたまには僕もこれ位するよ」

「いいのいいの。一人分やるのも二人分やるのもそんなに労力変わらないし」

「それなら僕がねーさんの食器も洗うよ」

「あー正直に言うわよ。今基本的に私が家事をやっているわよね？」

「うん。いつもやってもらっているから、たまには僕がしようかと」

「いや。私がやる分にはいいの。でも、私のやり方があるから他の

人にやってもらうと、どうも調子が狂うっていうか、そうじゃないのに！って思っちゃうのよね。だから私がするの」

なんだそういう事か。女性というのは家事に対して、自分の確立したやり方というものを持っていると聞いた事がある。そういった事が原因で、嫁と姑はお互いのやり方を反目しあい仲たがいするとか。祝日の昼にやっていたワイドショーの司会者が、女性から相談を受けるというコーナーでそういう事を言っていた気がする。

「そうだったんだ。ごめんね」

そういう理由ならこのまま手伝う事は、逆に邪魔になるだろうと考た。

「あついや別にあやまらなくてもいいんだけどね。まあ自分の部屋の掃除はしてもらうけど。そうしないと、勉強机の上から二番目の引き出しも掃除しちゃうわよ」

ねーさんは笑顔でそう言った。

ねーさんの笑顔に対して、僕も笑顔を返したのだが何故その引き出しの事を言ったのかを聞くのが怖くてさぞ、引きつっていたことだろう。

「はいはい、あんたは早く学校に行く」

食器を洗い始めていたねーさんに急かされ僕は、鞆を取り学校へと向かったのであった。

一章 二部

学校に着いたのは朝のホームルームが始まる十分程前だった。僕は徒歩通学で二十分程通学にかかってしまう。二キロ離れている生徒は自転車通学が許可されるのだが、僕の家は残念な事に、学校から二キロ圏内にある為自転車での通学は許可されていない。しかしいつも思うのだが二キロ調度の人は、家から十分程で学校に着く事だろう。僕は徒歩で二十分、その人は自転車で十分……。

何かおかしくないだろうか？

僕はこの是非を争点にして、ゆくゆくは生徒会長選挙戦に打って出ようと考えている。必ずや多くの賛同を得られるはずだ。

多くの支持を集め当選し必ずこの学校の全権を握ってやるのだ。男たるもの権力をこの手に握りたいと思うのは当然の事だろう。

まあ僕の同級生達はまだまだ、こんな事は考えていないだろう。生徒会長になりたいと考え始めた頃には、もう既に遅い。僕が綿密に中一頃から考え抜いたマニフェストの前にひれ伏すしかないのだ。

さて、何故僕が学校について早々このような事を考えているかというと。自分の机で、朝のホームルームが始まるまでの時間を弄んでいるからである。

朝だいたい十分前に学校に着くのだが僕は、クラスメイトと話す訳でもなく、自分の席でいつもこういった事を考える事が日課となっている。

別に僕は友達が出来ないわけではない。権力を握るためにはどうすればいいのかを一人で考えたいのだ。いわば自分の思考する時間を、大事にするための栄光ある孤立なのである。

ふと、僕は思考を止め教室を見渡すように顔を上げた。（僕の席は真ん中の列の最後尾であり、顔を上げると必然的に教室を見渡す事ができる）

僕の席から見て右前の方に男女の塊があった。その中心にいるのは誰であろう内藤である。内藤は自他共に認める、このクラスのリーダーへとなっていた（僕は認めた覚えはないのだが）。内藤がいるところには、人が男女共に集まるようになっていた。クラスメイトの多くは内藤と友人であることを、一種のステータスと考えているようで、いかにあの輪の中に入るかという事を大事にしているようだ。

しかし、このクラスが全員内藤グループに属している訳ではない。内藤グループに属しているのは基本的にあか抜けている人達だった。クラスメイト達は内藤グループを一軍、それ以外を二軍と呼称している。

わずか二ヶ月程の間で、このクラスにも格差というものが生じ始めたのだ。しかし、ほとんどの生徒はこの事に、不満を持っていない。

それどころか、内藤グループ以外では「俺今日内藤君と話したぜ」「マジかよ！羨ましいな」「ふふふ、君達僕などここ三日毎日挨拶をしているよ」などという会話が繰り広げられているのである。

これではまるで、内藤を王とした王国と、それに諂う属国である。僕はこのような状況にも、そして何の違和感も感じていないクラスメイトにも正直吐き気がする。僕がこの学校の権力を手に入れた時には、このような格差を必ずや是正してみせる。

この状況を見て再度心に刻んだのであった。

と、こんな事を考えている内に、先生が教室に入ってきてホームルームが始まった。今日も僕は朝の十分間をしっかりと有効に使う事ができたのだった。

一章 三部

さて、ホームルームもつつがなく終わり、授業が開始された。一時間目は数学だ。もちろん将来生徒会長を狙う僕としては、しっかりと授業を聴き、ノートもしっかりと取っている。先に行われた、中学に入ってから初めての中間テストでは五教科全てにおいて、平均点以上の成績を取ることができた。このまま今のペースでしっかりと勉強していけば、生徒会長などちよろいものだろう。

さて、僕は授業を聞くのは勿論の事だが、授業中の人間観察もしている。人の心理というものをしっかりと学んでおきたいからだ。ノートを一通り取り終えて僕は、教室を見渡した。まず、目に入ってきたのは内藤の姿だ。言っておくが別に内藤を意識しているから、最初に目に入った訳じゃない。たまたまだ。

内藤を見るとまだ、ノートを取っていた。ふっ俺よりノートを取るのが遅いなんてまだまだだな。やはり歯牙にもかける必要はないわ。本当に何故こんなやつが、クラスを中心になっているのか理解に苦しむ。

次に目に付いたのは内藤グループに属している女子の一人だった。確か、名前は斉藤優実だったかな。

自慢では無いが、クラスメイトの名前はあまり覚えていない。覚えていないのではなく、必要性を感じないから覚えていないのだ。この違いは大事だから間違えてはいけない。

その斉藤さんはノートをとるふりをしながら、携帯を弄っている。全くあんな奴がいるなんて内藤グループの品が知れるわ。まあ容姿はめっちゃくちゃ可愛いのだが。しかし、容姿がよくても、あのような態度ではどうしようもない。内藤もグループのリーダーならばきちんと注意をすればいいものを。

それに斉藤さんは先生にばれなければ、何をしてもいいとでも考えているのだろう。全く困ったものだ。

つとここで、先生が説明を始めたのでそっちに集中する。切り替えは大事である。斉藤さんはそれでも携帯を触っている。本当に困ったものだ。

再度、ノートを取り終わり、教室を見渡した。

ふと、僕の左となりを見ると円居円まどい まどかの姿が目に入った。彼女はいそいそとノートを取っていた。

彼女は僕とは違った意味でこのクラスから孤立している、僕はクラスメイトから意図的に距離を取っているが、彼女はクラスメイトから避けられているのだ。

彼女が避けられている理由は、僕ははっきりとは知らない。しかし傍から見て避けられている事は明白だった。積極的に休み時間にもクラスメイトに話しかけているが、口下手なのか会話が続き、すぐに自分の席に戻ってきては顔を伏せている。

まったくそこまでして友人とは作るものなのだろうか？出来る時は自分からずとも勝手に出来て僕の後ろから付いてくるはずなのに。円居から目を離し教室を見渡すと、手紙私をしている人や、隣同士こそそ話をしている人達がいる。友達関係を続ける為の努力も大変だな。

そして僕は天井を見上げて、小さく呟いた。

「皆友達友達……。友達ってそんなに必要なのかよ。俺にはすぐ離れていって、上辺だけの付き合いの友達なんていらないね」

こうして、いつもと同じ事を繰り返しながら学校での生活を終えたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2393p/>

M2（えむちゅ〜）

2010年12月21日23時40分発行